
火の約束

剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

火の約束

【著者名】

剣

【Zコード】

Z6145F

【あらすじ】

ロビン達と合流したジャスミンは兄とロビンがまた敵対するのではないかという漠然とした不安に襲われていた。そんな時、幼なじみのジェラルドが彼女の隣にいた。

(前書き)

黄金の太陽の一次創作です。

剣と剣が火花を上げて斜交いに交わる。ロビンの蒼い瞳と兄さんの黒い瞳が明確な殺意を持つて交差する。

「スペイアクレイ！」

ロビンが交差していた刃を引き、続け様にエナジーで土の槍を生成して、体制を崩した兄さんの頭上に落とす。

「サンド！」

避けられないと悟った兄さんは素早く地面と同化し、土の槍をかわす。

「グランドガイア！」

地面と同化したまま、兄さんはエナジーを発動するが、ロビンは是を素早くかわし、剣を構える。

「スペイアクレイ！」

サンドを解いた兄さんに土の槍でロビンが牽制する。

「…………」

無言のまま二人は剣を構える。射抜くような視線が一人の間を走る。

次の瞬間、爆発的に一人が身にまとうエナジーが増幅する。

「オデッセイ！」

「オデッセイ！」

二人が選択したのは地のエナジーで最強を誇る技だった。三つの剣がそれぞれ斜交いに、そして真っ直ぐに交差する。そして私の目の前は真っ白になった。

「兄さん…ロビン…」

私は目を見開いた。

「あ、あれ…………？」

私の目を闇が覆っているだけで何も見えない。そして自分が宿屋のベッドの上に横になつてこむことに気づく。

「ゆ、夢…………よね…………？」

よつやく目が暗闇に慣れてきて、宿屋の何とも言えない天井がぼんやり見えてくる。

「だつてロビン達はもう仲間なんだから…………」

そう言つて自らを落ち着けようと私の隣では、シバが穂やかな寝息を立てている。

眠れないと判断した私は夜風を浴びる為に、近くに掛けてあった上着を羽織つて部屋を後にした。

「う、寒い…………」

外の空気は私が思つていた以上に冷え込んでいた。すうっと大きく息を吸う。冷たいながら澄んだ空気が肺に心地いい。

「あれ、ジャスミンじゃねーか」

背後から聞きなれた声がして私はゆっくりと振り返つた。

「ジーラルド…………」

そこにはマントを羽織り、背中に大きな斧を背負つた私の幼馴染がいた。

「どうしたんだ、こんな夜中に早く中に入らないと風邪引くぞ

そう言つて呑氣そうに欠伸をする彼を見ていると私は張り詰めていた糸が切れたかのようにその場に座り込んでしまった。

「どうしたんだ？」

「ううん、何でもない」

差し伸べられた手をつかむ。彼の手は大きくて、硬くて、そして暖かかった。

「あつ……」

石ころもないのに躊躇いた私は彼の胸に顔をうずめる形となってしまった。

「お、おい」

慌てて彼がこけないように抱きとめてくれる。

「本当に大丈夫なのか？」

彼の胸に顔をうずめたまま、私は黙り込んだ。顔を離してしまつと、口ツブから水がこぼれるように今にも感情があふれてしまうだらうから。

「大丈夫な訳ないよな」

私の背中に腕を回しながら彼は言つ。そして静かな静寂。彼の心臓の音だけが私の耳をくすぐる。

「心配するな。俺が守つてやる」

辺りの静寂を破るかのように彼が呟いた。そして腕に力を込める。

「約束したからな」

再び紡いだ言葉に彼の決意を感じた。そして私は思いだした。あの日の事を……

私達が平和に暮していて、こんな旅に出るなんて夢にも思わなかつた頃だ。

いつものようにロビンと彼と遊んでいた私はスクレータの家の近くにあつたハンモックで昼寝をするのが好きだつた。

私は夢の中にいた。そこはハイディア村そつくりだつた、いや、ハイディア村そのものだつたが、村人が一人もいなかつたのだ。兄さんも、パパも、ママも、ロビンも、ジョンラルドも……夢から目覚めた私は怖くなつて泣き出してしまつた。そんな時、彼がこう言つたのだ。

「俺は絶対ジャスミンの前からいなくならない。ずっとジャスミンの事を守つてやる」

私は嬉しかつた。そして照れくさそうに笑う彼に何度もそれから助けられた。

「うん！」

だから私も笑う事にした。彼の隣で。

「そうだつたね……」

私は彼の胸から顔を離し、顔を上げた。私の頬からは大粒の涙側触れていた。

「ごめん。守つてやれなくて」

不意に彼の顔がゆがんだ。そしてそれは涙であふれている私の目にもはつきりと分かつた。

いけない……

私は目の涙をぬぐつて彼の顔を見据えた。

「ううん。気にしないで。私ももう泣いているだけじゃないんだから

そう言つてガツツポーズをとつた私に彼はそつと笑つてくれた。

「上です！」

イワーンの鋭い声が後ろから響く。彼の顔が驚きに包まれる。

「しまつ……」

「ヒュームワーム！」

炎のワームがモンスターを飲み込み、地獄の業火へとござなつ。

「ありがとう、ジャスミン」

彼が斧を振るいながら大声で言つ。その声に私は微笑みながら私は彼の側に歩み寄る。

「ジエラルド」

「何だ？」

肩越しに私は彼に話しかける。

「私は強くなる」

「ああ」

彼が背後で微笑む雰囲気がする。

「俺と一緒にな……」

「うん」

と同時に彼の見にまとっていた雰囲気が戦士のそれにかわつた。

「受身は性に合わないからな。仕掛けるぞ」

「うんー！」

私は強くなる、彼と共に。

(後書き)

久々の投稿、一年前の文章に赤面した剣です。まだ自分の文章に納得がいかないので、精進していきます！（とはいえ受験終了後になりますが……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6145f/>

火の約束

2010年10月17日02時59分発行